



未来を夢見て

2020/8/3 No. 27

授業研究会スタート

「見られること」が子供にとって最高の環境

7月31日（金）。久しぶりに校内研究に関連した授業を参観させていただきました。

6年2組に伺うと、西條先生の指示のもと、子供たちがきちんと課題に取り組んでいる様子が見られたので、安心して授業を参観させていただくことができました。常々思うのですが、こうして授業研究をしたり、教材研究をしたりすることができるのは教師としてありがたいことです。このように授業研究ができる要因の1つに、子供たちが落ち着いている、ということが挙げられる、と私は思います。

このことは逆も真なりで、校内研究を熱心に行っているからこそ、子供たちが落ち着いている、と言えるのではないのでしょうか。

なぜでしょうか。

それは、子供が授業研究で見られる機会が多い、ということに尽きると私は思います。授業参観で保護者の方々が来たときだけでも（少し）様子が違うように、他の学年の先生が自分の教室に来たり、ましてや違う学校の先生が見に来たりする、ということは子供たちにとっては一大事なのです。

その象徴が県内では宮城教育大学附属小学校です。

公開研究会でご覧になった先生も多いかと存じますが、授業や合唱での生き生きとした子供の姿は今も変わりません。「附属小学校の子供は特別だから」ということをお話される教育関係者の方もいますが、附属小学校の子供もみんな普通の子供です。また附属小学校でも世代交代が一気に進んで、若い先生方が中心の学校になっているのですが、それでも子供の姿が昔と変わらずにいるのは、公開研究会、校内での授業研究、教育実習、視察など、とにかく「子供が見られる機会」がとても多い学校だからなのです。

仮に、子供が落ち着かない、生徒指導に課題があるなどの問題に悩む学校は、そのことに直接向かい合うのではなく、校内研究を中心とした学校経営こそ、解決への糸口であり、たくさんの人が見られる公開研究会がそのための手段として有効だと考えていますが、みなさんはいかがでしょう？



8月3日（月）は6年4組で阿部先生が西條先生と同じ場面で授業を行いました。阿部先生の学級でも、子供たちが集中して課題に向かい合う姿が見られ感心しながら参観させていただきました。小野小学校の研究や先生方の姿勢で素晴らしいのは、このように学年全員で授業をする姿勢です。明日の3組の濱田先生だけが授業を提供するのではなく、授業研究を終えた翌日もさらに1組の小野先生が追試で授業をする姿勢には脱帽です。今日取材を受けたNHKの記者の方がインタビューをした5年生の子供の様子を大変褒めてくださいました。

学校は6年生や5年生が落ち着いていると全体が落ち着きます。高学年の難しい年頃と向かい合う先生方のご苦労は並のご苦労ではないように思いますが、小野小学校の子供たちが確かに成長していることを感じる8月のスタートとなりました。

（文責：手代木）